

現場 方を強める 安全衛生管理とメンタルヘルス

現場のメンバーたちと喜びを分かち合える 安全で健全な職場づくりを目指して

監督者の仕事はとにかく大変です。苦勞の多い仕事です。スタッフからの指示も、上司からの指示も、結局はすべて監督者に集中します。生産性が極限まで求められ、人員もギリギリまで削られたなかで、監督者は“変化”に的確に対応しなければなりません。

工場幹部がいない夜間の職場では、監督者は「夜の工場長」とも言われます。事実、生産現場のあらゆる責任を背負って活躍する監督者の働きが、日本の生産活動の原動力になっていると言っても過言ではありません。

監督者は、日々の生産活動において昼夜を問わず、「生産目標の達成」「品質目標の達成」「災害ゼロ」の役割を担って努力しています。生産、品質、安全の確保はメーカーの使命です。監督者は、生産だけ、品質だけ、安全だけの目標を達成しても、合格ではありません。生産も大事、品質も大事、安全も大事で、生産・品質・安全の達成を「三位一体の活動」として実現できなければなりません。

安全について、肝に銘じておかなければならないことは、「生産は取り返せます」「品質も取り返せます」、しかし「人の命は取り返せない」ということです。無災害を目指して100人の職場の全員が必死に努力しても、たった1人の災害を発生させれば、100人から1人を引いた答えは「ゼロ」になるのです。すべての努力が「無」に帰するのです。

災害防止は決して楽な任務ではありません。作業者のちょっとした油断、ちょっとしたミス、材料や設備のちょっとした不具合が、災害の芽になり、命取りになります。「人・物・管理監督」の欠陥が事故・災害を招き寄せます。

安全、そして健全な職場づくりは、地味で根気と情熱がいる仕事です。監督者の役割は、きつく、つらいものですが、みんながケガなく、生産・品質目標を達成し、部下とともに達成の喜びを分かち合える瞬間こそ、監督者の生きがい、働きがいになるのではないのでしょうか。

目 次

はじめに	3
第Ⅰ部 災害ゼロを実現する安全管理の取り組み	5
第1章 労働災害発生のメカニズムと災害防止の考え方	6
1. 「ヒヤリ→事故→災害」の連鎖を止める	6
2. 不安全行動を起こす“心”の働き	8
3. 不安全状態が生み出される過程	9
4. 安全管理体制の構築と管理・監督者の役割	11
5. 管理・監督者の基本使命「4 Mの管理・監督」	12
第2章 人的要因による災害の防止策	14
1. 作業者の安全意識と災害防止	14
2. リーダーシップと災害防止	16
3. 安全教育・指導の思わぬ落とし穴	19
第3章 設備的要因による災害の防止策	21
1. 機械・設備の本質安全化	21
2. 治工具・保護具の整備と管理	23
3. 徹底したい現場保全と点検・整備	25
4. 類型災害（はさまれ、巻き込まれ、飛来落下、爆発火災）の防止	27
第4章 作業・環境的要因による災害の防止策	30
1. 定常作業における教育・指導	30
2. 非定常作業における教育・指導	33
3. 作業環境・原材料・運搬具による災害の防止	35
*研究課題	38
第Ⅱ部 労働安全衛生活動とメンタルヘルスケアのすすめ方	39
第1章 安全衛生管理体制の構築(管理面の対策)	40
1. ラインによる安全衛生管理活動	40
2. 管理・監督者がすすめる現場教育・指導のポイント	43
3. 現場に生かすセーフティアセスメントの考え方	45
第2章 快適な職場づくりとメンタルヘルスケア	47
1. こころの健康・からだの健康	47
2. 職場でのメンタルヘルスケアの取り組み	51
3. 管理・監督者のカウンセリング・マインド	54
第3章 小集団自主活動の効果的な取り組み	57
1. 安全の諸活動	57
2. 衛生の諸活動	66
3. 健康づくりの諸活動	68
第4章 労働安全衛生法と管理・監督者の責任	71
1. 事故・災害発生時の管理・監督者の責任	71
2. 企業の四重責任と労働者責任	75
3. 管理・監督者の法的責任	77
*研究課題	79

第 I 部

災害ゼロを実現する 安全管理の取り組み

1

労働災害発生のメカニズムと 災害防止の考え方

1. 「ヒヤリ → 事故 → 災害」の連鎖を止める

(1) 事故と災害を区別する

事故 災害 私たちは日頃何気なく「**事故**」と「**災害**」を区別せずに「事故が起きた」「災害が発生した」と言いますが、安全管理上は、「事故」と「災害」は区別してとらえることが必要です。

物的 「事故」は、建屋、設備、材料などの**物的**な不具合、故障、破損状態を言い、「事故」の状態では、人のケガは発生していません。

人的 「災害」は、人がケガをしたり障害を受けるなどの**人的**な死傷害をともなった状態を言います。

事故と災害を区別する目的は、物的事故を起こしても、あくまで「物の損害」ととどめ、人の命や身体に損傷を与える「災害」につながらない対策を講じるためなのです。

災害ゼロ 企業でも、職場でも「**災害ゼロ**」を目標に掲げて、安全活動を展開しますが、「災害ゼロ」を達成する前提に「**事故ゼロ**」を目指すのが、本質安全化への道なのです。

事故ゼロ

もちろん、事故の前には、事故の前触れとなる「設備機械の不具合」

や「人の不安全行動」による「ヒヤリ・ハット」の危険現象がありますので、「ヒヤリ→事故→災害」の災害発生メカニズムを理解し、的確な管理と監督行動によって、この連鎖を止めなければなりません。

ヒヤリ・ハット

(2)「ハインリッヒの法則」が示唆するもの

有名な「ハインリッヒの法則」は、保険会社を取り扱った災害件数55万件を統計的に分析した結果から、災害の程度別の発生件数割合は「**重大死傷災害 1 件に対し29件の中程度災害，300件の軽災害**」と指摘しています。重大および中程度災害の裾野には10倍もの軽災害が広がっているというわけです。

ハインリッヒの法則

重大死傷災害 1 件
29件の中程度災害
300件の軽災害

この法則を災害の前段階、つまり「人がケガをしない段階」に当てはめてみると、事故件数が3,000件、ヒヤリ・ハットが3万件となります。

「事故ゼロ」「災害ゼロ」と目標を掲げるのは簡単ですが、達成するには、少なくとも3万件のヒヤリ・ハット件数対策をこなさなければならないのです。

管理・監督者には、この膨大な量の対策をまっとうする情熱と信念と根気が必要になります。

